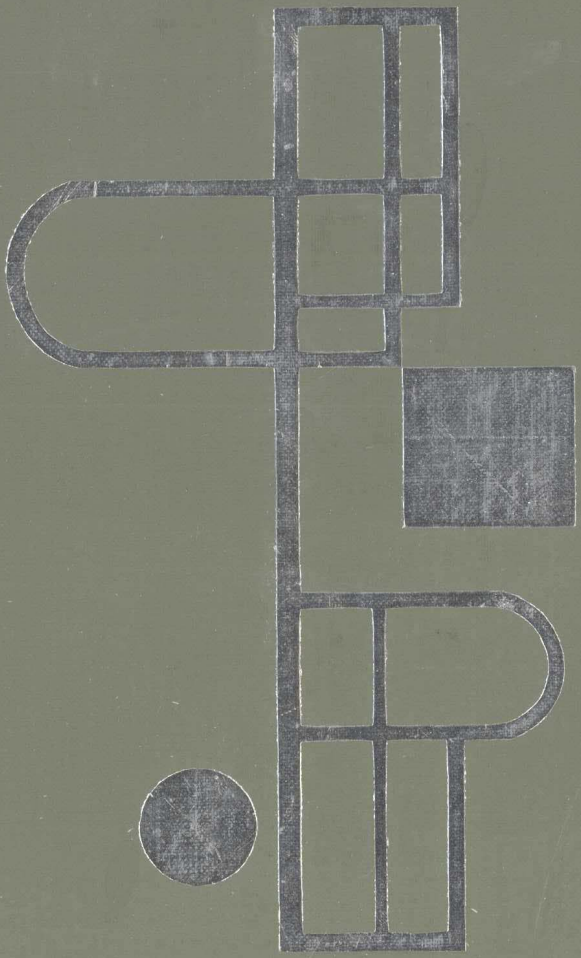
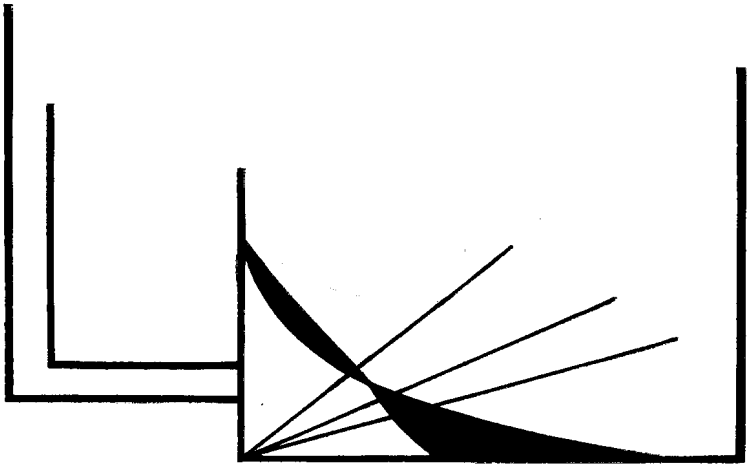


永井龍男集

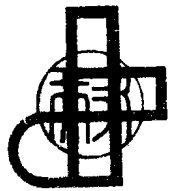
新選 現代日本文學全集

10



筑摩書房版

新選 現代日本文學全集 10



永井龍男集

昭和三十四年十月二十五日 発行

著者 永井龍男

発行者 東京都千代田区神田小川町二ノ八 古田晁

印刷者 東京都青梅市根ケ布三八五 山田一雄

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八 筑摩書房
〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

製本 株式会社矢島製本
印刷 株式会社精興社
整版 株式会社精興社

永井竜男集　目次

風ふたたび……五
外燈……七〇
遠い横顔……一七六
四角な卵……二〇二
バースデイ・ブック……二二〇
おんなのひと……二二七
眼ざまし時計……二八三
少年唱歌隊……二九〇
枯芝……二九五
電車を降りて……四〇〇

灯……四〇六
蜜柑……四一〇
永井竜男論……河上徹太郎　四一六
解説……浦松佐美太郎　四二

装幀　恩地孝四郎
恩地邦郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

永井龍男集

河原よもぎ

つぎはぎだらけの、職業安定所の上にも、ひさしぶりの青空が見える。

夜中の豪雨が、重苦しい梅雨空を、どうやら切り放したらしい。

代々木へ向けて、渋谷駅を出た山手線の電車が、この辺でスピードを増し、車体をかしげながら、ゆるい上りこうばいを走り去る。

線路下の土堤にそって、はちまきをした半裸の若者が、一球一球、むきに力をこめた、キャッチ・ボールをしている。もう、ひるに近い暇な時刻だ。

線路の、向う側へ抜けるには、それから二三町先きの、背をこごめるように低い、狭いガードをくぐる。

くぐり抜けると、白い小さな河原よもぎの花が、空き地一面に咲き、白いちょうが、そこここに、眼まぐるしく舞つていた。みそ汁のように赤くにごつた溝が、ごうごうと地響きをさせて流れていた。

黒いかさをさし、四角な風呂敷包みを背負つた、かいきんシャツの男が、ガードからのだらだら坂を、ゆつくり上つて行く。

ぬれしよぼたれた、ボール箱そのままの、ちまちました家々が、かツと射し始めた日をうけて、男の行く手にひろがる。日まわりも唐もろこしも、もうかなり背が高い。

額の汗をふき、手にした紙切れに眼をとめてから、男は、ようやく路らしい路に入つた。湿気のある暑さの中で、男の体が薬臭かつた。

――富山の薬売り。根気にまかせ、脚にまかせる古風な商売が、いつの間にか復活していた。

「ごめん下さい」

男は、もう一度紙切れと、標札をにらみ合わしてから、一軒の家に声をかけた。ガラスの格子戸を細目に開けると、台所まで見とおせ、目新しい水色の蚊帳を、庭のさおにかける、むき出しの女の腕があつた。

つり手の金具が鳴るほかは、シーンとしている。

「ごめん下さいまし」

「……はアい」

商売のカンで、最初の一声でその家の気風が解り、楽に行く、行かぬの判断がつくのだそうだ。若い声だが、娘の声ではないらしかつた。

「一寸、おたずね致しますが、こちらに、鎌倉にお住いだつた、久松さんがおいでになりますでしようか?」

答えはなく、縁へ上るけはいがしたが、やがて、上り口のすぐわきの間から、花模様の、ビニールのエプロンをした女が、静かに現われた。

男は、日よけにさしてきた、黒い傘をすぼめた。

形のよいふくらはぎに、庭のどろの、ベトリとついているのが、ひどくなまなましく、男の眼に入つた。

前髪のカールから外したらしい、クリップの一つ二つが、手の中に光り、

「どういう御用でしようか」

と、短いスカートのひざをついた。心持ちきつくしたひとみが、男を見つめていた。

「どうもお邪魔を致します。わたくしは、富山の薬屋でございますが……」

「とやまの?」

「鎌倉の久松さんが、こちらへお引越しということで、薬の入れ替えに伺いましたが……」

「とやまの薬つて、ああ、あの大きな袋に入れた……。まあ、よくここが分つたこと!」

来訪者への気構えを、一度にくずす色が見え、片方のひざを、スカートのすそで、かくすようにした。

「鎌倉へ上つたのは、別の者でございますが、同じ組合なので、連絡をたのまれまして」

「さあーつと、どつかにしまつてあつたような気がするけど……。あの袋を置いてつたのは、三月ごろだつたかしら」

「さようでございます……」

「だけど、えらいものね。ここまで探し当てる

なんて」

やせて、日に焼けた中年の薬屋は、上り口に置いた風呂敷包みをとき、五つ重ねの籐カゴを拡げた。薬のにおいが漂い、あくどいまでに赤や黄色を刷り込んだ、いろいろな薬の小袋が、女の眼に、もの珍しく映つた。

薬売りは、帳面をひろげた。

「二月の二十三日にお願いしてございます。鎌倉のおうちの方へ、五月の末にお伺いしたところが、こちらへお引越しだということで……」

「そうだつたわね」

さりげなく女は言い、それ以上、妙に世なれた、なまりのある言葉で、自分に触れられるのを、いとうかのように座を立つていつた。

「……たしかにあるはずよ。一寸待つて頂だい」

「どうぞごゆつくり。……あの、奥さま、足にどろがついております」

「あらあら……」

上り口の二畳のほかは、二間続きの六畳が、ある程の家である。

貨物列車の、重い鈍いひびきが遠のく中で、薬売りはたばこに火を附けた。戸だなのふすまを開け立てする音がしずまると、やがて奥から、

「あつてよ！」

と、声がした。

「なんにも、使つてないはずよ」

がさがさする大きな紙袋を、薬売りに渡し、種痘のあとの、かすかに残つた白い腕が、うしろ髪をかき上げた。急に暑さが増していた。

「富山の薬つて、効くのかしら」

「とんでもない、奥様」

「無理に置いてつたんだけど、あけて見たこともないわ」

「……解熱剤を二服、お使いで……」

「あら、そんなことないわ。よく調べて頂だいよ」

そこへ拡げた薬の中から真鍮色の指輪をはめた薬売りの指が、思い切りよく封を切つた解熱剤の袋を、より分けてみせた。

「二服でございます」

「まあ、不思議だ。だれが使つたのかしら……」

「奥さま、手紙もはいつております」

「手紙？……」

開封した手紙が一通と、転任あいさつを印刷した葉書を、薬売りは、女の前にさし出した。

手にとつた和紙の封筒には、太目のペン字が少しにじみ、鎌倉の住所と、加藤氏方、久松香菜江様と、自分あての名が記してあつた。

すぐ裏を返して、差出人を見たが、東京都杉並区阿佐ヶ谷四七八番地、宮下孝という名にまつたく記憶はなかつたし、こんな手紙を読んだおぼえも思い浮ばなかつた。

しかし、裏表を見返すうちに、三月二十日という日附が、香菜江の焦点を、一時にはつきりさせた。

この薬袋の解熱剤を服んだ者が、香菜江と同室者に限られるとすれば、別れた「夫」よりないのだし、「妻」あての手紙を開封したのも、彼の他にある訳はない。

そのころの日々が、むつと、香菜江の胸を圧して来た。

……前々夜から家を明けた彼が、正午前に勤先きを早退して帰り、風邪を引いて頭痛がすると、言葉すくなに言い、すぐ寝込んだことがあつた。

外出の支度をしていた香菜江は、そのまま、この渋谷の叔母の家へ、後々の相談に出てしまつたが、その時の彼の顔色がよくなかつたのも、思い出すことが出来る。

彼はその時解熱剤を飲み、午後に来た郵便を、床の中で読んだのであろう。香菜江にあてた未知の男からの手紙は、別れると定つた彼の疑惑と、興味を呼んだものに違いない。

借りた離れの、寒々とした室のうちも、荒んだ彼の風貌も、まざまざとよみがえつてきた。

翌朝、出勤時にそそくさと床を上げ、枕もとのものを薬袋へ一さらいに押込んだということは、薬売りが、新聞にはさみ込んだらしい、鎌倉商店街の「春の大売出し」の広告ビラを、仔細らしくわきへ置いたのでも分る。

別れたのは、それから二三日してからであつた……。

「二服で、おいくら？」

「四十円でございます」

せつせと、帳面に照し合わせては、新しい薬

を、大袋に詰め替えている男に、香菜江はいら立つた。

蟻が、自分達の道を決して見失わず、それからそれと、仲間の領分をひろげるように、家から家、村から町を縫いつないで、細かな商売を積み重ねる薬売りは、ここにも一つ足がかりを見つけたつもりで、香菜江のいら立ちなぞには、まるで無関心だつた。

「また、置いて行くつもり？」

「どうぞ、一つ。御邪魔になるものでもございませんし、何かの時のお役に立ちます」

「あんまり、お役に立たれたくないわ。それに、またどつかへ居なくなつても、知らないことよ」

「なんの奥さま。組合員が全国を回つておりますから、お手数はかけません」

「奥さま」が不快だつた。

香菜江はガマ口を開いた。千円札を二枚、二つ折りにしたのと、十円札が五六枚入つている。十円札で払つては、後で小銭に困るかも知れない——。

「千円で、おつりあつて？」

「はい、差し上げます」

しかし、すぐ香菜江は、

「いいわ、あるわ。四十円ね？」

と、十円札を数えた。

千円札をくずすのが、急に惜しくなつていた。

荷造りをし終つた薬売りのうしろ、半開きのままの硝子戸から、若者が首を出した。

「おばさんは？」

額の汗を手のひらでなで上げ、学生帽をずらして、香菜江を見上げた。叔母の縁つづきになる、貞次という二十前後の大学生だ。

「館よ。とうに出かけたわ」

「おじさんも？」

「うん、今日はいそがしいらしいわ」

「水一杯飲ませてよ」

貞次は、あいさつして出て行く、薬売りと入れ代りに、上り口で靴を脱いだ。急に男くさかつた。

「もう、学校お休み？」

「あと、二三日なんだ」

叔母は、駅に近い映画館へ、売店を出している。二階席へ通じる階段の下に、キャラメルやせんべい、南京豆、のしいかの類を小奇麗に並べた店がある。売れ行きがよいはずの、チューイン・ガムだけ置いてないのは、後の掃除に困ると、館主の方から、販売を止められているからだ。

退職後の叔父も、この商売に身を入れ出したが、その辺で顔がひろくなり、他に用事の出来た時は、香菜江も時々店番を手伝つた。

どの品も二十円止りの、子供相手のあきないだけに、上映映画の種類で、売上げが眼に見えて違う。恋愛をまともに扱つた外国映画なぞの時は、入場者の数とは無関係に、品物はほとんどはけない。

時代物のチャンバラや、西部劇がかかると占めたもので、ターザンや凸凹物は、このごろ少しあきられたというようなことが、売上げの上にはつきり表われた。

やわらかにほぐした、「のしいか」よりも、「やきいか」という、焼いたままのするめをパラピン紙で包んだ、無造作なものが沢山出る時は、不思議に大入りだという事実なぞは、この辺の観客に限らず、都民の生活のある部分を、おのずと語つているようだつた。

去年の夏までの、アイス・キャンデーが、今年からスマックに代り、六月のある土曜日に、叔母は千二百個という記録を出した。

本格的な夏が来ると、場内でのアイス物の売れ行きは、逆に止つてしまう。暑さのはじめと、盆の十五、十六日が目標だから、梅雨明けを思わせる今日辺りから、叔母は手ツ取り早く、勝負しようと目論んでいる。

「きのう、鎌倉へ行つて、ひどい眼にあつちやつた」

「……あの雨に、どうしてなの？」

「アルバイトの口を、たのみに行つたのさ」

香菜江は、縁に近い柱へ背を寄せかけ、台所で水を使う貞次に、気のないうけ答えをした。

古い手紙の、宮下孝という名前が、どうにも腑に落ちなかつた。台所の板の間がきしみ、貞次の声が近づいた。

「海岸にドライブ・ウエイが出来て、ずいぶん変つたぜ」

「……そう」

——ああ、また寄りかかつている、と、香菜江は思つた。体に暇が出来ると、柱や壁に背をもたせて、自分にも定かでない、ぼんやりした考えごとのようなものに沈む癖が、いつの間にか身についていた。

そういう自分を、香菜江は憎み出していた。

「またパチンコ？」

縁に来た貞次が、手つかずの「光」の銀紙を、器用にめくるのを、香菜江はチラリと見た。

「二十円で、玉を十もらつて、何度に一度、光がとれるの？」

「十の玉が、二十五になれば、ピースが一個。二十で光、十でアメさ。出て来た玉を、うまく使うのがコツなんだ。二十円で、光一個は間違いなしさ」

「それじゃあ、むこうは、商売にならないじゃあないの。だから、ユセの光なんかが横行するんだわ」

「だつて、これまでに、相当もとを入れてるもの。それに、ぼくたちみたいなのがいるからこそ、つられてくる、新規のカモはたえないし、盛り場の現金商売だから、むこうはむこうで、上つた金を、裏で敏速にまわすのさ。……抜け目はないさ」

マッチ一本つけるにも、若者達の間に生れたジェスチュアが、貞次の身についている。

「サラリーマンでね、勤めの行きか帰りに、必ずパチンコやへ寄る奴が、たくさんいるんだぜ」

「煙草かせぎに？」

「パチンコやの方で、機械の調子さえ変えなけりゃあ、そんな連中、二十円で光二個は楽なもんさ」

「道理で、遊んでいるような、のんびりした顔なんか、一つもないわ」

「そういう連中が、ラッシュ・アワーのビルを出る時や、駅の階段を押し出される時、不意にね、自分がパチンコ玉のような、気になることがあるんだつてさ」

「悲しいわね」

「十の玉が、どれも同じ玉のように、自分を押してる奴も、自分に押されている奴も、みんな、あんまり違つた人間じゃないと思うと、変な気がするんだつてさ。ビルや工場や、駅のパチンコを使つて、俺達をころがしてる奴は、誰なんだろうなんて、考えるそうだ。……学生のうちが、一番花さ、つて言うのが、連中の定り文句だけど」

ありきたりの、転任通知の葉書を一べつすると、香菜江は手紙の中味をひろげた。

その横顔から、後れ毛のあるうなじに、貞次の眼が行き、白粉けのない香菜江の肌を、なに気なく吸いとつた。無視されれば、されたたのしみが、貞次にはあつた。

「香菜江さん、マージャン出来るんだつて？」

「……出来てよ。下手だけど」

「そうでもないでしよう……」

「なぜ？」

香菜江は、文面から眼を離さなかつた。

そこにある香菜江の腕には、たんぽぽのくきを流れるような、白い血が通つているのかも知れなかつた。五つ六つ上の女の、しかも結婚生活を経てきた肌に、貞次はそんな風な好奇心を感じていた。

「すごく、マージャンに凝つたんだつてね……」

「だれが？」

「だれがつて……」

香菜江の視線が、貞次をひるませた。

「パイの音つて、実際いいからね。夜なんか、通りがかりにあの音がすると、〝コンバンワ〟とかなんとか言つて、そこの家へ、入つて行きたくなつちやうんだ。アナタハンに残つてた連中だつて、きつとマージャンを作つたと思うんだ」

「すこし、だまつていて……」

香菜江の離婚を知つている者は、若い銀行員の夫が、マージャンづきあいに溺れて、生活をかえりみないような男だつたからと、一口にそう言つている。

——香菜江が六歳の時に迎えた継母と、その後に生れた、腹違いの弟達。大学講師の父を中心に、家の中の折り合いも、とり立てて悪いという方ではなかつた。

戦争中に女学校を卒えると、香菜江はすぐ軍関係の役所へ勤めた。ひつ迫した生活を、切り抜けるために、みんな命をかけていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山の手の住いが、戦災に逢つた時は、すでに独身寮に寄宿していて、長野の方へ疎開する一家とは、それ以来離れることになつた。

戦争が終ると、解散のはずだつた役所は、復員者の事務を扱う一機関に転身した。彼女達の毎日の仕事は、ぼう大な数の、未帰還者のカードを、端から整理して行く、極めて事務的なものだつた。

世の中が落着きを示すにしたがつて、軍時代の灰色な気分を、どこかに残した独身寮にも、眼に見えて色彩が加わつて行つた。変化を求めて、他の職業を選ぶ者も、結婚生活に入る者の数も、急に多くなつた。

市ヶ谷の高台にある、事務局附属の独身寮からは、牛込辺りの焼跡が一望にながめられた。彼女達は、焼野原の中に、一日一日と小さな灯が数を増すのを、毎晩のように、三階の窓からながめた。

結婚したばかりの、友達のアパートで、香菜江は初めて彼にあつた。身だしなみのよい、若い銀行員で、明るく素直な第一印象であつた。

戦後にふたたび教職を得た父は、仙台に一家を持つたが、ながく継母の健康がすぐれず、香菜江に家事を見て欲しいと、再三言つて来ていた。

しかし、父の家に帰る意志は、まつたくなかつた。継母や異母弟達との、十数年間の生活にも、香菜江は疑問を感じていた。

人々が焼野原に寄り合い、まもり合う灯を、香菜江はしんけんに恋した。

その人なつこい色の灯を、自らの手でともしたいばかりに、三月ほどのつきあいの後で、結婚の約束をした。

後妻への義理か、父からは同意の返事はなく、渋谷の叔父夫婦が親代りで、万事をすすめたが、これが先ず、同居のしゅうとめの、気を曲げさせる原因にもなつた。

ありふれていて、決して片附くことのない、妻としゅうとめの問題は、荒れた手先きにまつわる、真綿のはしのようなものである。だれかに取つてもらわなければ、始末はつかない。二人の間に入つて、足並みを乱した若い夫が、鎌倉へ別居の決心をした時は、もう遅かつた。

銀行での役目をねらつて、誘惑の手が、彼の上にのびていた。母への、無理な仕送りのためにも、憂さを晴すためにも、取引先きとのマージャンが、茶屋酒が、必要であつた……。

カチンと、裏木戸のさんがはずれた。

すだれの巻いたのを小わきに、つばびろの帽子に半ズボンの叔父が、庭へまわつてきた。

「おい、かな助！　妙なことになつたぜ」

新しいすだれを縁におき、帽子のふちで、赤く筋のついた、はげ上つた額をふいた。

「なんですの、妙なことつて」

「それがさ……。貞次、台所からぞうきんを持つて来てくれ」

貞次が、台所の方へ二足三足行くと、畳がべトベトと音を立てた。

「ついでに、自分の足をふいてこい。汚い奴だ」

「さつき、洗つたんだ」

「うそつけ！」

叔父は、すだれを解きながら、

「道玄坂で、これを買うとね、中元大売出しのクジをくれた。これが、お前、大当りだ。ガランガラン鐘が鳴つて、タンス一さおと来た」

「まあ、ほんとかしら」

「名前と住所を、張り出されたから、うたがうなら、見てこい。なんだか知らんが、見てくれは立派だよ。売出しがすんだら、取りに行くんだそうだ。ひどく、きまりの悪いもんだつた」

「パチンコ以上だな……」

と言う貞次に、

「かなづちと、くぎ箱だ。すだれをかけるから、手伝え」

「よし、アルバイトの口がかかつた」

「お前を使うと、どうせ、後で高くつくが、まあタンス祝いだ」

「叔母さん、知つてるんですか？」

「うん、鼻の頭に、汗をかいてた」

……タンス、タンス、タンス到来と、叔父は野球放送の口真似まじりで、ばらりとすだれをひろげた。

びつくりした叔母の顔が浮び、香菜江は一人笑いをもらしながら膝元の手紙を、封筒におさめた。

拝啓　小生は、かつて御尊父の教えを受けた者だが、先生が戦後どこで、どのようにお過しか、知る方法がなかつた。
偶然の機会に、久松氏の令嬢である貴女と、小生と知り合いの川並陽子さんが、同窓であることを知り、この手紙をさし上げる。
至急連絡したい用件があるので、折り返し、久松先生の現住所をお知らせ願えれば幸である。

百余日前に、「宮下孝」から来た手紙は、このように簡明な文面で、本人の香菜江ですら、なにか当ての外れたようなものを、感じるのだから、ある種の期待で封を切つた別れた夫が、無造作に、薬袋にさらい込んだ気持は、手にとるように明かだつた。
性格のもろい彼にとつては、やみからやみの、一度つつ込んだら足を洗えぬ、「浮き貸し」の秘密取引のためにも、御破算のほかはない処まで来た、夫婦生活の憂さを忘れるためにも、連夜の酒とマージャンが、絶対に必要だつた。
自業自得のかんなで、自らの健康までをけずり出していた彼は、熱くさい床の中で、孤独の思いにかられつつ、もうじきに別れる妻あての手紙を、ひそかに開いたのだ。
それにしても「至急連絡したい用件」とは、当時、どんな意味をふくんでいたのであろうか？
とにかく、返事を出すのが、礼儀というものであろう。
……叔父の打ち込む、釘の音が、香菜江の胸に、一本一本、きびしくひびいた。

特別二等車

夜明け前の仙台駅へ、前後してすべり込む、三台の自動車があつた。
四時四十分発、二三等急行、上野行きの「北斗」に乗る客で、見送りの中には、白足袋の眼立つ、若やいだ女の声もまじり、にぎやかに、改札口を通つて行つた。
送られる客は、実業家の道原敬良を中心に、ほかに実業家が二人、それに画家と経済雑誌の編集長、世話役の秘書に、附添いの社員といつた、六七人の一行である。
道原敬良達の資本下にある、北海道の炭礦を、視察するというのは名目で、気の合つた実業家が三人、追放解除の内祝いに、のんびりと旅をたのしもうということで、これに懇意な画家と、編集長が参加した。
秘書の手で、旅行の予定表が作られるころから、是非仙台へも寄れと、同系会社や旧知から声のあつたのを、一行は往きに素通りした。
北海道の行く先きざきへ、再三再四電報が飛び、どうしても、一晩仙台に寄らなければならぬ、義理が出来た。
急に予定を変え、きのうの「みちのく」で、ひる過ぎにここに着き、未明の「北斗」で、ここを発つ、あわただしい旅の終りになつた。
その日の午後の東京に、是非用事のある者が二人もあつた処から、こんなきゆうくつな、日程になつた訳だが、仙台に降りれば降りたで、疲れを見せるような、なまやさしい連中ではなかつた。
一風呂浴びれば、ケロリとして、まずビールを一口という、豪の者ぞろいだつた。
二度も三度も、場所をかえ座敷をかえて、ほとんど徹夜でのみあかし、景気よく自動車で送られて来たのだ。
ホームの端まで来て、ぼんやりたたずんでいた画家が、
「ちよつとした、気分じやないか……」と、後から、静かに話しかけられた。
ふり返ると、いつの間にか、見送りの人々を離れた道原が、画家のそばにいた。一癖ある口もとが、微笑にほぐれると、にらみの利きそうな眼にも、不思議に人なつこい表情のわく、どつしりとした五十男であつた。
「……ええ？」
「旅路の終り、という気分がさ」
「道原さんでも、そんなことを言うのかな」
ホームの灯の下で、見送りの妓達にかこまれ、しきりとはでなやりとりをつづけている、加宮や安岡という、道原よりは五つ六つ年上の、「おじいちゃん」連の方を、道原と画家は、いたずらそうな眼つきでながめていた。

二等車に乗る客は、一行の他にはないようである。

「あんたの長唄には、旅中なやまされたが、これでさて、当分聞けないと思うと、一寸さびしいから、妙なもんだ」

「そのうち、四国の方へでも、また出かけようや」

その辺を、二三歩ゆきもどりして、道原は空を仰いだ。暁けらしい青さが、わずかにましていた。

アナウンスが、「北斗」の到着を知らせ出す中を、酒くさい編集長が、道原の方へ寄つて来た。

「道原さん。あれ、富田進じゃ、ありませんかね……。改進党の……」

そつと、指さされる方を見て、

「まさか」と、道原はつぶやいた。

カバンをさげた、中老の紳士が、ひつそりと立つていた。

「しかし、よく似ていますがね……」

朝へ朝へ、列車はふたたび、スピードをましていた。

窓ガラスの冷えが、乗客の肩に、それとなく染み込んだ。

「さて、ひとねむりするかな」

「まあ、そう先手先手と、急いでくれるな、お前に、先きへねむられると、いびきで、こつちがねむれんわ」

「こいつ、自分のいびきを、たなにあげて……」

向い合いに、腰がおちつくと、「おじいちやん」組の、加宮と安岡が、わきの編集長を行司に、また小声で、取組みをはじめた。

「しかし、つくづく驚いた。達者なもんだ、お二人とも」

「そりやあ、君、きたえ方が、まるで違う」

「いや、さすがに、もう沢山だ。おれは早く、ミイコウの顔が見たい」

「なんだ、ミイコウとは……」

「ねこだよ！　おれンとこの」

「まだ、ねこだなぞと言いおる。この、くそじじいが……」

スリッパの脚を組み、思わせぶりに、眼をつむつて見せる加宮へ、安岡が、たたきつけるように言うと、思わず編集長は笑い出したが、すぐ自分の声をのんで、周囲を見まわした。

灯のついた、新しい特別二等車の中は、それほど静かだつた。

秘書と社員が、一行の荷物を、ジュラルミンのたなへ、こまめに整理し終つて、「おじいちやん」組の後ろの席に、腰を下すと、あとは車中に動くものはなく、車輪のリズムにさからうかのような、ゆうちような寝息が、どこかから聞えてくる。

「わりに、すいてるのは、ありがたいですな」

「寝台も、あいとるだろう」

「この上、人さわがせをするな。……追放が解除になつてから、お前のいびきは一段とさえてきた。かあいそうに、こんな奴でも、永い間気がねしていたと見える」

きりのない、やりとりを聞き残して、編集長は席を立つた。

「原ノ町、平、水戸と、九時すぎが、たしか水戸です、すこし、寝ますかな……」

通路をへだてた、窓ぎわの席は、道原と画家がひざをつき合わせている。それにも声をかけ、編集長は秘書の隣りの席へ行つた。

「安岡老は、いつごろから、耳が遠くなつたかな」

「もうだいぶ前からだよ。がんこな男ほど、早くつんぼになるのかな」

道原は、ネクタイを解きながら、微笑まじりに画家に答え、座席の背から、首をのばして、

「おい、君。すまないが、着物と帯を出してくれ」

秘書の方へ、低い声で言つた。

車窓をかすめる、雑木林の黒が、空の透きはじめたのを、気ぜわしく告げた。

「そこに、富田進に似た男が、いるだろう……」

やがて、着物と帯を持つて、後ろに回る秘書の耳へ、道原はさりげなく、ワイシャツを脱ぎながらつぶやいた。

「……はあ、なるほど」

六十に入つたかと思われる、痩せて、顔色のさえぬ紳士が、なにか、パンフレットらしいも

のを、ひろげていた。
「君は、編集長の資格はないね」
結城の一重のそでを、心持ち肩へたくし上げた道原が、顔を洗つてもどつた編集長を、見上げて言つた。
三人とも、一眠りした後である。
「……ええ?」
「改進党の富田が、たつた一人で、しよんぼりと、仙台あたりから、汽車に乗るものか」
「ああ、その話ですか……」と、編集長は、洗面具をカバンにおさめた。
「似ているが、あごの線が、まるで弱いや」
一座席先きの、筋向うに当る、例の紳士を、しきりに写生する画家が、スケッチ・ブックの中へつぶやいた。
「職業はなんだと思う?」
スケッチ・ブックをのぞいてから、道原が退屈そうにささやいた。
「官吏かな……」
「ちがうね、ひどく疲れている」
「うん、疲れている。年より、大分老けてみえる人だ」
「六十には、まだ入つてないだろう」
「医者?」
「いや、学校の先生……、という処かな」
「まさに、御名答!」
道原と画家の、退屈しのぎの問答に、編集長が口を入れた。
「君は、どうして知つているんだ」
くしを使いながら、編集長は、二人に顔を寄せた。
「たなの上のカバンに、名刺が附いている。安岡さんの荷物の、となりですよ……久松精三郎だつたかな。なんとか大学の、教授ですよ」
「そんな処は、なかなかジャーナリストなんだがな」
加宮も安岡も、むこうの席で、眼をさましていた。
水戸で降りる客が、身支度を始めるのを機に、秘書が要領よく立ちまわつて、他の客と交渉し、左右の席を一行だけで占めることが出来た。
「なんだ、そのはでなバッジは……」
窓ぎわにつるした、安岡の夏服のえりを、道原が指した。
「解除になつたからといつて、すぐ会社の記章もつけられんよ。テニス協会のバッジだ」
「安岡一流の、妙な見栄だよ」
加宮がすぐひやかした。
仕事の上で、永年顔を合わせて来たせいか、この旅行中、道原は二人の実業家仲間とは、まとまつた話をしていない。話相手には、いつも画家と編集長を選んで、画の話や世間話に身を入れた。こうして三人が寄り合うと、働き盛りの五十男として、道原の風貌が、きわ立つて見える。
画家のスケッチ・ブックにも、たくましい眼鼻立ちや、横顔から首から肩へかけてのエネルギッシュな線が、何枚も写生されている。
杯を持つたのや、女の肩を抱いたのがあるかと思えば、すべて大ぶりな、眼、鼻、口もとを、部分だけ、くつきりとスケッチしたものもある。
道原の頬に、いつも消えない血の気を、鉛筆の先きで、なんとか表わしたいと、画家は努力したのであろう。
「バッジといえば、愉快な喫茶店が、某所にあるんですよ。そこへ行くと、金鵄勲章が、ピンからキリまで、全部そろつています」
秘書が配る、二重べんとうを受取りながら、編集長は話題を変えた。
「功一級から、功七級の金鵄勲章をね、十日間十日間の、売上げ順位に応じて、女給の胸につけさせる。ナンバー・ワンは功一級です。もちろん、別に賞与も出る訳だが、部屋の壁に成績表ははつてあるし、一目りよう然で、功一級から、功七級なんぞへ、落ちたくはないのが人情だし、いつまでたつても、勲章にありつけない、となれば、居たたまれませんや」
「ほんとうかね?」
「なんなら、ご案内します」
「いやだね。いくら商売でも、そこまでやるのは……」
「芝に、大将中将の第一装から、金ピカの大礼服ばかりをつるして、客寄せに使つている古着屋があるが、あれも、変な気のするものだよ」
弁当を配り終えた秘書が、ブランデーのびんを持ち出すと、さすがにみんな顔を見合わせたが、

「食欲増進の意味で、一杯もらおうか」
まず、加宮が、勇敢に口を切つた。
「アペリチフという処でね……」
と、画家もグラスを手にした。
曇り日だつた。梅雨冷えとでもいうのか、ワイシャツ一枚では、はだ寒い感じである。
遠く近く、空を映して白く光る、田の中に、草取りの人々が、点々と散つていた。夏桑の畑が、線路ぞいにつづき、やがて町中に入つたと思うと、小さな駅が現われては、飛び去つた。
水戸駅を出ると、新聞紙の音が、にわかに車内にみちた。
トイレットへ立つた道原が、一度席へもどつて、すぐまた引き返した。
忘れ物でもしたらしい様子であつたが、それ切り姿を見せないので、画家が通路の向うへ眼をやると、ちようど、道原がとびらをあけた処で、お互いの視線が合うと、こちらへ「おいで、おいで」をして見せた。
画家は、ニヤリとして、鼻の先きで、手を横に振つた。
〝いやだよ〟というジェスチュアだつた。
往きの汽車の中から、時間つぶしに始めた、「美人さがし」は、乗物にのる度にくり返されたものだ。
「もう沢山だ。東京へ着けば美人は一杯いるんだ」
もうそろそろ、遊山の気分から、抜けたいと思つていた画家は、ひとり言のように言つたが、微笑をまじえた道原は、「おいで、おいで」の手を、さらに細かく、しきりに振つた。
仕方なく立つて行つた画家が、ドアの外へ出ると、洗面所に、半分体を入れた道原は、いたずらつぽい眼で、
「おい、金を抜かれたよ」
と、ゆつくり言つた。
「……金を？」
「ふところの財布を、トイレットの網だなにのせたまま、出て来てしまつたが、すぐ気がついて引つ返すと、だれか入つていてあかない。その人が、出るのをここで待つていた訳だが、たなに置いた財布が、手洗いのところにあつた」
「……」
「一応、中身をしらべると、帯封をしたままの十万円が、抜かれているんだ」
「……で、その出て行つたというのは？」
「実は、あの、富田に似た紳士なんだが……」
「そういえば、ついさつきまで、よく眠つていたのに、いま、たなからカバンを下して、なにか、さがし物のようなことをしていた」
画家は、見たままを口走つた。
「……で、他に金は？」
「別に三四万、バラで入れてあつたが、それは財布と一しよに、残つていた」
「どうして、残したんだろう」
「出来心がさせたんだ。玄人なら、財布も、捨ててしまうのが定石だよ」
「あなたの後へ、あの男が、すぐ入つたことは、時間的に、確実なんだね？」
「席までもどつて、すぐ気がついたのだから、二分とはかかつていない。まず間違いなしだ」
「近ごろの、法律だと、こういう場合の取調べは、なかなか面倒なんだろう？」
「うん。現行犯という訳ではないし、このごろの二等車の客で、十万円くらい持つているのは、ザラだろうから、シラを切られれば、こつちの負けだ」
「どうする……」
「秘書を呼んでくれないか。……みんなには、黙つていてくれ」
一人になると、道原は鏡の方へあごを伸ばし、ひげの生え具合を映して見たり、指さきで、ドアを軽くたたいたりした。
秘書を連れて、画家がもう一度もどつてきた。
「仙台を発つ時、君に一束もらつたね」
「はあ、十万円、さし上げましたが……」
「あれを、トイレットで抜かれたよ」
道原は、もう一度秘書に、経過を話した。
「とにかく、専務車掌を……」
「車掌を呼んでも、同じことだろう」
「しかし……」
「まあ待て。……座席へかえつて、それとなく様子を見ようじやないか。あの男だとすれば、そう落着いてもいられまい。届けるのは、後でもよかろう」
「たなから下した財布を、手洗いへ置いたのも、手口としては、下手ですが」

「出来心だよ。おれの置き忘れが、一番悪いんだ」
「編集長が、名刺を見たと、言つていたね」
「大学の先生で、久松とか言つていた」
「やはり、仙台から乗つた客のはずです」
「おれが、外からノックした時に、奴さん、ひどくあわてたに相違ないんだよ。きつと、その時に、持つてた財布を、ひよいツと、手洗いの上に置いたんだ。……出合い頭に、おれの顔を見て、妙にぎくりとして、〃失礼しました。忘れ物をしたので〃といつたが、返事もしないで、行つてしまつた。おかしな人だなとは、思つたがね」
水の多い、霞ヵ浦地帯に入つていた。小さな鉄橋を渡るたびに、急行列車は、気ぜわしく騒音をあげた。
「決定的な話ではないし、しばらく、連中にはしやべるなよ」
「は、せつかくの旅行の終りを、どうも……」
道原を先きに、三人は、車内へ入つた。
さつきまで、画家の占めていた席へ、黙つて道原は腰を下した。そこからは、彼を、真向いに見ることが出来る。
「いくらか、きれいなのを、見つけてきたか？」
安岡老の言葉を、聞き流しにした道原は、例の微笑を浮べていたが、鋭い視線は、彼のひろげた新聞に、じつとそそがれていた。彼の脚が、何度か組みなおされた。
——彼は、三分と新聞を読んではいなかつた。パンフレットを取り上げ、ぱらぱらページをめくつたと思うと、老眼鏡をはずして、窓ガラスの方へ、そつとため息をはき、ごましお髪をかきなでた。
眼をつむると、疲労のかげが、一層深くほおにあらわれ、だれの視線をも、さけているように見えた。
筑波には、雲がかかつていた。桐の木立の向うに、支線の軌道が光つていた。
眼をつむつたばかりの彼が、もう、そんな風景を、そわそわと追つていた。
隣席の太つた男が、武骨な親指の腹で、ナイフをぐいぐい使い、リンゴをむさぼるのが、道原の眼に、ひどく対照的だつた。
加宮、安岡、編集長、それに附添いの社員と、四人の座席では、開城へ特派された日本人記者が、イギリスと韓国の記者団から、忌避されたという記事が、話題にのぼり、耳の遠い安岡の声が、時々辺りを驚かせた。
道原のひざを、画家がつついた。
「やはり、一応届けておく方が、いいかもしれないね」
「さあ……」
「あの男だ、と決定的に言い切れる、確証はつかんでないのだし、事実、他に犯人があるかもしれない。彼だけ、うたがうのは、当を得ないことにもなる」
「どちらにしても、公安官を呼んだ方が、はつきりして、よろしいと思いますが」
秘書も、二人の耳に顔を寄せた。
「こんどは土浦だろう？　着いたら、盗難にあつた、という届だけは、してもいいね。君達の気がすむなら」
「あなたにとつて、十万円という金は、なんでもないか知れないが……」
「とんでもない。ぼくにしても、大金だよ。ただ、自分の失敗で、人をさわがせたくないんだ」
道原はそう言い、筋向うの席へ、視線をうつしながら二人にささやいた。
「見たまえ……。あの男の髪が、急に白くなつたとは、思わないか？」
スピードにのつて、進行中の車内はリキのかかつた独楽に似ている。
左右にゆるく、車輛をかしげながら、自分の速力を、ひそかにたのしんでいるかのようだ。
その通路を、濃紺のスカートに、シャツ・ブラウスの女が、たくみに調子をつけて、足早やに、通り抜ける。
両側の座席には、手もふれようとしない、体の重心のとり方が、それだけで、見る人に快い感じを与える。
「あら！」
と、その女は、道原のわきで止つた。道原の顔が、〃はてな〃という風に、女を見上げていた。
「まあ、しばらく……、丸ビルの、川並でござ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com